

会計事務所クラウド化 マニュアル

スマホ版

会計事務所クラウド化マニュアル ナビゲーションメニュー



全体目次



第1章【意識、価値観のクラウド化】
目次



第2章【人材活用のクラウド化】
目次



第3章【コミュニケーションのクラウド化】
目次



第4章【情報共有のクラウド化】
目次



第5章【会計ソフトのクラウド化】
目次



第6章【顧問先のクラウド化】
目次



第7章【会計事務所クラウド化の手順】
目次

はじめに

ここ数年、会計業界のあちらこちらでこのような声を聞くことが多くなりました。

「いや！会計業務がなくなるわけがない」

「紙のレシートなどがある限り、記帳代行がなくなるはずがない」反対意見も様々ありますが、筆者の見解はこうです。

「会計事務所はなくなるらない。しかし、今の会計業務のうち正しい数字を作るような業務の大半はやりたくない仕事になる」

会計事務所がなくなってしまうわけではありません。また、記帳代行もなくなるわけではありませんが、仕事があったとしてもやりたくはない。つまりは、

記帳代行の帳簿作成を例にあげましょう。報酬を時給換算した際に、「時給 3,000 円ならやりたい」と手をあげる人は多いはずで

しかし、時給換算したら 300 円にしかならなければ……。そのような仕事を みなさんはやりたいと思うでしょうか。おそらく、やりたくないはずで

本編でも触れますが、昨今会計業界は慢性的な人手不足といわれています。

人手不足といわれる業界に共通するのは、労働条件や労働環境に対して賃金 が安いということです。当然、労働条件などに対して賃金が高い方が、人も集まります。

一方で賃金が安い業界は「やりたくなくなる業界」なのです。だから人が集まらないのです。

そして、やりたくなくなる業界に多くの場合共通しているのが、本書でとりあげる「クラウド化」が進んでいないという状況です。では、なぜ会計業界のクラウド化が進んでいないのか。

原因の考察や解決方法は本編で詳しく解説しますが、筆者は既に 20 年弱会計業界に身をおいています。そのため、既

存の会計実務の状況も、長くクラウド化できない理由も非常によくわかります。

それらの理由を踏まえた上で、1つの答えとして、筆者の事務所の取り組みや実体験を中心に本書を執筆しました。本書で最も伝えたいのは、会計事務所のクラウド化とは『意識改革』だという事です。

- **なぜ、当たり前前に事務所に足を運んで仕事をするのだろう。**
- **なぜ、紙の資料がなくならないのだろう。**
- **会計事務所報酬をもらって仕事をするってなんだろう。**
- **得る報酬に対して提供している価値ってなんだろう。**

このような疑問は事務所をクラウド化していく過程で筆者自身が自問自答しそして再定義していったことを実感します。

一方でクラウド化で業務を効率化すればするほど変えなくてよいものや大切にすべき本質も見えてくる気がしてきます。クラウドで何を効率化し、そして何を残すのか。『会計業界に従事する者としてみんな一度立ち止まって考えてみよう』

そんな思いを込め現役税理士が書いた、会計事務所目線の会計業界従事者に向けた『会計事務所クラウド化マニュアルスマホ版』です。

ぜひ、ご一読いただければ幸いです。

税理士

廣 升 健 生



序章

本書をお読みいただくにあたって



第1章 意識、価値観のクラウド化

1. 会計事務所のクラウド化はなぜ進まないのか
2. クラウドのメリットとは
3. 各人が感じる会計事務所クラウド化のメリット
4. 会計ソフトの前段階をクラウド化する
5. 会計事務所の業務がペーパーレス化しない理由
6. 会計業務のクラウド化を実現するクラウドツール等
7. ワンクリックオペレーション
8. ワンクリックオペレーションは複式簿記
9. ワンクリックオペレーション、フローとストックの考え方
10. 会計事務所における紙の役割を考える
11. マニュアルをストック化する
12. 仕事を振る発想
13. クラウド人材活用の心得
14. テキストコミュニケーションは情報伝達率を意識する
15. クラウドツール等の選び方
16. 会計ソフトの独自機能に依存しない
17. 会計事務所のクラウド化で得をする人、損をする人

序章

本書をお読みいただくにあたって

このたびは、本書【**会計事務所クラウド化マニュアル**】を手にとっていただき大変ありがとうございます。本編に入る前に、この序章【**本書をお読みいただくにあたって**】では、どのような趣旨で本書を執筆したかを述べたいと思います。

まず、本書を読み進めていただく前にお断りしておくことがあります。

それは本書は
**会計事務所のクラウド化の
マニュアル**

であって、

**クラウド会計ソフトの
使い方マニュアル**

ではないという事です。

もし、クラウド会計ソフトの操作方法やクラウド会計ソフトの活用例などを期待されているようでしたら、あまりご期待には添えないかもしれません。

なぜなら、本書は、タイトルに掲げた【**会計事務所クラウド化マニュアル**】のとおり、会計ソフトのクラウド化ではなく、会計事務所における業務全般のクラウド化のためのマニュアルだからです。

つまり、クラウド会計ソフトの活用という狭義のクラウド化ではなく、会計事務所の業務全般における広義のクラウド化について述べています。

広義の クラウド化

会計事務所の
業務全般のクラウド化

狭義の クラウド化

会計ソフトの
クラウド化

では、なぜ広義のクラウド化をテーマに本書を執筆したのか。

筆者は、2014年にクラウド会計ソフト freee の操作マニュアル本ともいえる『**会社の経理を全自動化する本**』（翔泳社）を上梓しました。

この本は、クラウド会計ソフトの操作方法を中心に紹介していますが、実務においてクラウド会計ソフトを使用していく中で、あることに気がついたのです。

それは、顧問先へサービスを提供したり、会計事務所の業務を効率化する上で、会計ソフトをクラウド化することは、

ベストであるが マストではない

ということです。

筆者は現在、会計事務所とは別に、クラウド化のノウハウを他の会計事務所に提供するコンサルティング業務に取り組んでいます。

その上で、当然のことながら、従事する職員が多くなればなるほど、また年齢に幅が出てくるほど価値観やキャリアは多様であり、その各人が業務を効率化する為の手段としてクラウド会計ソフトは絶対必須のツールではないということを実感しています。

そのため、本書では、次のような方にこそ、お読みいただきたいと考えています。

- 業務効率化のため、クラウド化を進めていきたい。
- しかし、クラウド会計ソフトに切り替えるのはハードルが高いと考えている。

もちろん、本書でも事務所で取り組んでいるクラウド会計ソフトを活用した業務効率化の取り組みなどは、多くのページを割いて紹介しています。

しかし、本編でも繰り返し述べますが、クラウド会計ソフトを活用しなくても十分に事務所の業務効率化はできるのです。そのようなスタンスで読み進めていただいた上で、やはりクラウド会計ソフトは必要であるかそうでないかの判断は、読者の皆様に委ねたいと思います。

本書の構成

このような考え方から、本書は次のような構成でお伝えしていきます。





第1章

意識、価値観のクラウド化

第1章では、「なぜクラウド化をするのか」、「クラウド化をするとどのようなメリットがあるのか」、「そもそも、会計事務所ではなぜ、非効率な業務が常態化しているのか」、そして「その解決方法は」という疑問に対し、大局的な観点と個別の事例を合わせてお伝えしていきます。

この章は、本書の中で非常に多くページを割いていますし、最も伝えたい内容となっています。

というのも、どんなに便利なクラウドツールやクラウドサービス（以下、クラウドツール等）があっても、それを使うのはあくまで人であり、その人の意識や価値観がクラウド化しない限りは、どんなにクラウドツール等の解説をしても意味がないと考えているからです。

そのため、本章では意識、価値観を従来の思考からクラウド思考にシフトチェンジを図っていただきます。



第2章

人材活用のクラウド化

どんなに便利なクラウドツール等があっても、それを使用し、活用していくのは「人」です。

詳細は本編で詳しく解説しますが、廣升健生税理士事務所（筆者の事務所）は、常勤の職員やパートスタッフが一切いない個人会計事務所です。

ただし、会計業務をひとりで行うことはほとんどありません。クラウドサービスを活用し、クラウド上で業務を行うメンバーとチームを組んで業務を分業しながら遂行しています。そうした人材活用の仕組みを中心に紹介していきます。



第3章

コミュニケーションのクラウド化

第3章からは、具体的なクラウドツール等の活用法について解説します。会計業務をクラウド化する上で、テキストを中心としたコミュニケーションは不可欠です。

そしてクラウド化による業務の効率化とは、突き詰めていくと『**情報伝達の円滑化**』なのです。そこで、筆者の事務所で使用しているビジネスチャット Chatwork（チャットワーク）の活用方法とともに、読まれる文章の作り方や読み落としの少ない文章の書き方などを紹介します。



第4章

情報共有のクラウド化

第4章では、情報共有をテーマに、Googleドライブの活用方法を中心に解説します。

会計事務所の業務の非効率の原因を検証していくと、事務所の職員同士や顧問先との資料の受渡し、整理に多くの時間が割かれています。

筆者が考える会計事務所のクラウド化の本丸は、この情報共有の非効率について、クラウドを活用する事でどう円滑にしていくかということであり、事務所での取り組みを紹介します。



第5章

会計ソフトのクラウド化

第5章の前半では、会計ソフトのクラウド化をテーマに筆者の事務所でのクラウド会計ソフトを使った分業によって会計帳簿を作成する方法をご紹介します。

また後半では、クラウド会計ソフトの代表格であるクラウド会計 freee、マネーフォワードクラウドそしてインストール型会計ソフトの代表格である弥生会計の機能比較を紹介しています。冒頭でも述べたとおり、筆者の考えとして会計事務所のクラウド化においてクラウド会計ソフトはマストではありません。

そのため、インストール型の弥生会計も含めた機能比較を掲載しています。また、会計ソフトと連携する事も多い人事労務ソフトについても上記3社の機能比較を解説していますので、事務所でのクラウド化への取り組みや職員が使い慣れているのかどうか、そして顧問先のニーズなどを鑑みた上で、自身にとって何が最適なサービス（ツール）なのかを検討下さい。

※本文内で[クラウド会計ソフト]とはクラウド会計 freee とマネーフォワードクラウドを総称する名称として認識してください。



第 6 章

顧問先のクラウド化

第 6 章では、顧問先のクラウド化について解説します。冒頭でお伝えした通り、本書では、クラウド会計ソフトやクラウドツール等を活用した顧問先へのサービス提供については、詳しい説明はしていません。

本書でお伝えしたいのは、あくまでも会計事務所の中のクラウド化であり業務効率化ですので、本章は本来であれば必要のない内容です。

しかし、資料の受渡しやコミュニケーションにおいて、顧問先も含めたクラウド化は避けては通れません。そのため少しの工夫で顧問先を事務所のクラウド化に参加してもらえる取り組みや心得などを紹介します。



第 7 章

会計事務所クラウド化の手順

会計事務所クラウド化の手順最終章（第 7 章）は会計事務所クラウド化の手順です。

筆者は、会計事務所のクラウド化で一番大事なものは、第 1 章で紹介する意識や価値観をクラウド化する事であり、2 番目に大事なものはクラウド化の手順だと考えています。

事務所の規模や職員の属性（スキルや年齢など）が多様になればなるほど、手順の重要性が増すのです。理想は持ちつつも現実的な実現可能性を考察しながらクラウド化の手順を提案していきます。

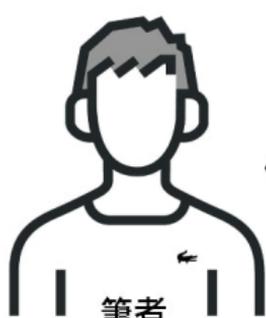
◎本書の読み方

本書は全 7 章で構成されていますが、第 1 章は総論的な内容であり第 2 章以降は各論の内容になっています。そのため第 1 章を読み終えていただきましたら、第 2 章以降は興味のある章からお読みください。

1

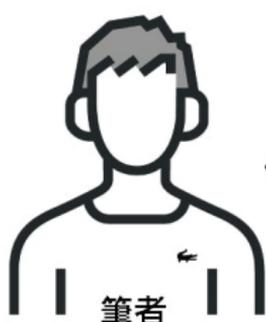
会計事務所のクラウド化はなぜ進まないのか

ここから本章をはじめていきますが、まず、皆さんに1つお聞きします。



皆さんの会計事務所でクラウド会計ソフトを導入して業務の効率化を実感できていますか？

あるいは、まだクラウド会計ソフトを導入していないという方へ。



既にクラウド会計ソフトを導入した同業者から実際に効率化したという声を聞いていますか？

さて、いかがでしょう。

この質問をした時に、当然ながら効率化を実感しているという方とそうでないという方がいると思います。

その場合に、比較的小規模の会計事務所では、クラウド会計ソフトの効果を実感しやすく、10～30人程度の中規模以上の会計事務所では効果を感じにくいという声を異口同音に耳にします。

この中規模以上の会計事務所がボリュームゾーンにあたることから、結果、クラウド会計ソフトが浸透していない事がイコール会計事務所のクラウド化、業務効率化が進んでいないという肌感覚につながっているのではないのでしょうか。

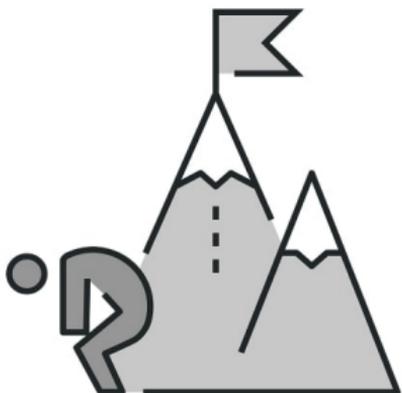
※本書では中規模以上の会計事務所のクラウド化をテーマとしています。そこで以降、「会計事務所」とは中規模以上の会計事務所を指しているとイメージしてください。

クラウド会計ソフトが浸透しない2つの理由

ではなぜ、クラウド会計ソフトによって業務が効率化した人としない人がいるのでしょうか。この理由を探っていこうと思います。まず、中規模以上の会計事務所において効率的にクラウド会計ソフトを活用できない理由としては、下記の2点があると考えます。

職員全体の
メリットが見えない

正しく
使えていない



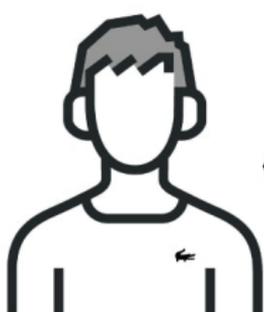
(1) 職員全体のメリットが見えない

よく、同業者から次のような質問を受けます。

クラウド会計ソフトで
効率化を実感できない。
どうやって
活用すればよいか？



こうした質問を受けた際には、筆者は必ず次のように聞き返します。



そもそもですが
クラウド会計ソフトを使う
メリットは
なんだと思いますか？

そうすると、多くの場合こう答えが返ってきます。

銀行通帳などの取引明細の
自動取り込みと
会計帳簿の自動作成
ですよ？



あらかじめ断言しておきますが、クラウド会計ソフトを使うメリットが「**会計帳簿の自動作成**」だけ、あるいはこれが一番のメリットだと考えている時点で、【**会計事務所のクラウド化**】、つまり**会計事務所の業務の効率化は進みません**。

視点を変えて考えてみましょう。

そもそも会計帳簿の自動作成でメリットを受けるのは誰でしょうか。会計事務所である程度以上の規模になると、一般的な組織体制は「**所長**」以下、顧問先を担当する勤務税理士や科目合格者（以下、「**顧問先担当**」）、そして顧問先担当の補助的な業務として会計帳簿などを作成するスタッフ（以下、「**帳簿作成スタッフ**」）に分類できます。

※このほかに総務関係のメンバーなどもいるかと思いますが、会計実務には直接携わらないので本書の説明上は割愛します。

所長

顧問先
担当

帳簿作成
スタッフ



さて、現場で会計ソフトを使用して会計帳簿を主に作成しているのは「帳簿作成スタッフ」ですが、この場合、組織全体にメリットがあるのかを考える必要があります。

インターネット広告やセミナーなどで目にするクラウド会計ソフトの導入事例には、「帳簿入力スタッフの person 費がクラウド会計ソフト導入後に○分の 1 になりました」、「person 費が大幅に削減できて効果が絶大です！」といった類の文言がよく並んでいます。

こうした文言を見るたびに、1 つの疑問が沸き起こります。「帳簿作成スタッフ」は、自分自身のメリットとして捉えるのでしょうか。

おそらく、事務所経営者（所長）の立場であれば、事務所経営において person 費が大幅に削減できるというメリットを感じることでしょう。反面、帳簿作成スタッフの立場からすると、帳簿作成が自動化するということは、自分の仕事がなくなるかもしれないということ。つまり、自分で自分の首を締めているに等しいのです。

すると、クラウド会計ソフトを実際に使う帳簿作成スタッフは、そのメリットを口にするためにためらいを覚えることでしょう。そのため、事務所内での共有が遅々として、その活用は進まないのです。

自分で自分の仕事を奪ってる？



また、顧問先担当のメリットはどうでしょうか？

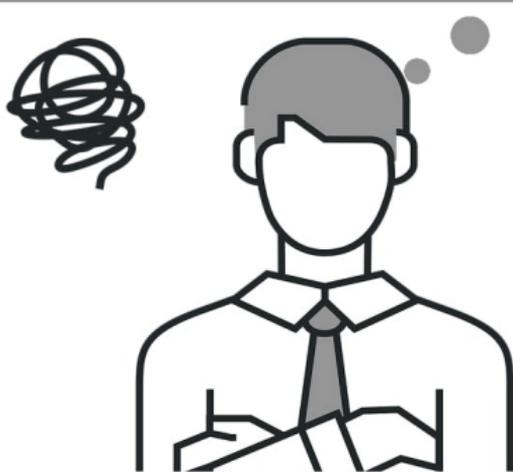
使い慣れた会計ソフトを、クラウド会計ソフトに切り替える。会計ソフトに限らず、使い慣れたツールやサービスを新しいものに切り替えるには、その手間をはるかに凌駕するメリットを感じることができなければ、新しいことには挑戦したくはありません。

「**会計帳簿を自動作成できること**」は、そもそも、会計帳簿の作成が業務のメインではない顧問先担当にとっては、メリットは感じにくいはずです。

また顧問先担当が会計ソフトを操作するのは、会計帳簿のチェックや顧問先のニーズに合わせて会計ソフトのデータを表計算ソフトなどにエクスポートしたり、詳細な内訳書を作成するなど使い慣れた会計ソフトのかゆいところに手が届く機能を重宝しているはずで

そうすると顧問先担当にとっては使い慣れていないクラウド会計ソフトのメリットは感じにくかつデメリットばかりが目立つわけ

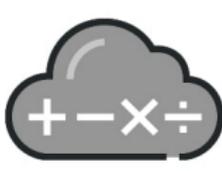
なんで新しい事を
やらなきゃいけないの？



(2) クラウド会計ソフトの 使い方が間違っている

もう 1 つの理由は、帳簿作成スタッフが自身の業務負担を軽減したいという前のめりの姿勢であっても、実際にクラウド会計ソフトを使ってみると、従来の使い慣れた会計ソフトの方が使いやすく感じてしまうということです。結果、クラウド会計ソフトが使われないこととなります。

筆者はこの理由について、鉄砲と刀の違いを例に、従来のインストール型の会計ソフトとクラウド会計ソフトを使用した会計帳簿の作成では、アプローチが異なると伝えています。

刀	鉄砲	インストール	完全クラウド
			
近 距離	遠 距離	近 距離	遠 距離
個 対峙	多 対峙	個 対峙	多 対峙
高 スキル	低 スキル	高 スキル	低 スキル

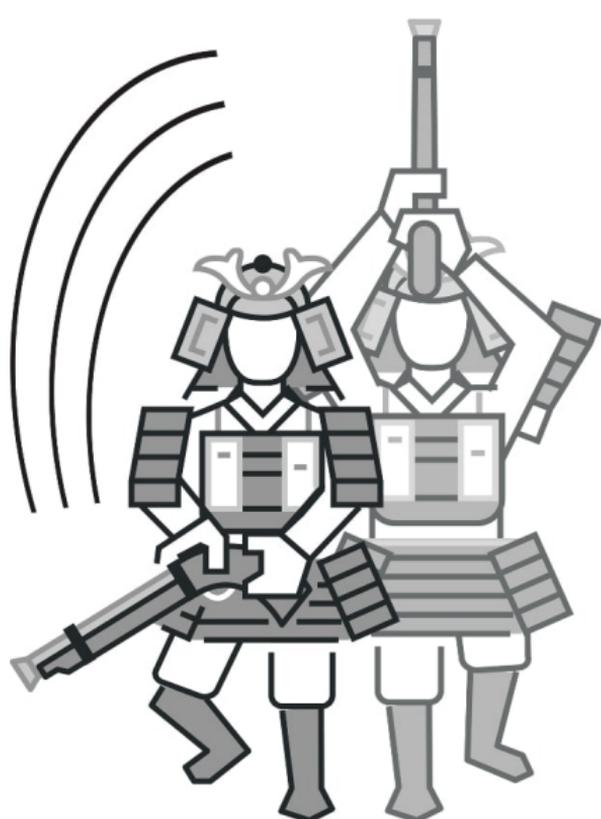
具体的には、刀は対一、近距離、そして修練が必要であるのに対して鉄砲は遠距離、複数、そして刀の使い方に比べれば修練度は低い。

会計ソフトについても、従来の会計帳簿の作り方であれば、ある特定のメンバーが事務所のパソコンにインストールされた会計ソフトを使い、借方と貸方に数字と勘定科目を正しく入力していくスキルが必要です。

一方でクラウド会計ソフトを使うと、遠隔で操作できるほか、複数で業務を分担することができます。さらに、自動同期機能やデジタルデータの取り込み機能によって自動作成できるため、従来の方法よりも容易に業務が遂行できます。

筆者の事務所におけるクラウド会計ソフトを使った会計帳簿の作成方法は第 5 章で詳しく解説しますが、つまり今まで使い慣れたインストール型会計ソフトからクラウド会計ソフトに切り替えるというのは、全く別の武器（ツール）に持ち換えて日々の戦（仕事）をしているようなものなのです。

この正しい理解をせずにクラウド会計ソフトを使用するというのは、武器が刀から鉄砲に変わっているのに鉄砲で素振りに励んでいるようなもの。そうであれば、そもそも刀（使い慣れたインストール型会計ソフト）の方がよいと結論づけるのは至極当然のことなのです。



鉄砲で
素振り
をしても
意味が
ない

(3) 2つの原因を裏返せば 会計事務所のクラウド化は進む

クラウド会計ソフトが浸透しない2つの理由を挙げましたが、この理由を裏返して考えると、個人事務所などではクラウド会計ソフトの活用が進むというのも納得いただけることでしょう。

個人の会計事務所であれば、顧問先の対応は1人で行わなければならない、会計帳簿の入力も自分自身で行う範囲が大きいはずです。

その業務についてクラウド会計ソフトを活用して自動化できれば、メリットこそあれデメリットは感じにくいのです。
また、クラウド会計ソフトの正しい使い方も、自分自身が理解すればよいと、新しいツールにもスムーズに移行できるのです。

翻って、中規模以上の会計事務所についても、取り上げた2つの課題解決さえすればよいといえるでしょう。

つまり、1点目の課題「職員全体のメリットが見えない」は、裏を返せば所長をはじめとした職員全体が強烈なメリットを感じることができるなら、クラウド会計ソフトの活用はもちろん、会計事務所全体のクラウド化が進みます。

また、2点目の課題「そもそもクラウド会計ソフトを正しく使っていない」についても、クラウド会計ソフトという視点だけではなくそもそもクラウドにはどういうメリットがあり、逆にデメリットがあるのかを正しく理解すればメリットを活かした活用方法も見えてくると捉えることができるのです。



第1章

意識、価値観のクラウド化

2

クラウドのメリットとは

前項では、クラウド会計ソフトのメリットは会計帳簿の自動同期や自動作成に限らない。それだけでは、事務所全体のメリットにならないとお伝えしました。

では、クラウド会計ソフトを活用した際のメリットは何なのかを掘り下げたいのですが、クラウド会計ソフトのメリットは、結局のところクラウド会計ソフトも含めたクラウドコンピューティング（以下、クラウド）のメリットを理解しないと話ははじまりません。では、クラウドのメリットとは何でしょうか？

システムエンジニアなのか、クラウドを会計実務で使うユーザーなのかによっても感じるメリットは異なるはずですが、後者の立場で感じるクラウドの最大のメリットは「**情報の一元化**」です。



クラウドのメリットは 情報の一元化

情報の一元化とは、簡潔に言ってしまうとクラウド上の情報を集約して管理するということです。「**クラウドのメリットを一言で**」と言われればこれが全て。これが本質なのです。つまり、クラウド化の意義を「**情報を一元化すること**」と捉えると、そこから派生したメリットがクリアになってくるのです。

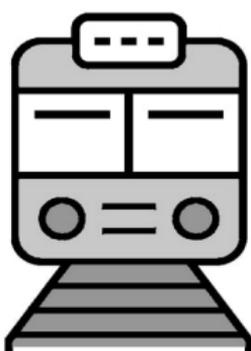
情報の一元化で 実感する4つのメリット

クラウドの活用によって情報を一元化すると、様々なメリットを実感できます。その中で、会計実務を行う者として特に実感するのは、下記の4つです。

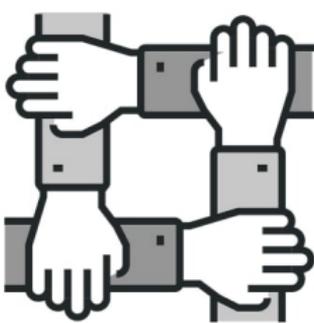
情報の見える化



移動時間 (ロケーションフリー)



業務の分業化



会計帳簿の 自動作成



① 情報の見える化

クラウドによって情報を一元化すると、まず格段に情報が可視化されることに気づくでしょう。

具体的な仕組みづくりや運用方法などは第 3 章の【コミュニケーションのクラウド化】、第 4 章の【情報共有のクラウド化】で後述しますが、情報をいつでもどこでも見えるようにすると、情報の伝達スピードや精度が従来よりも格段に向上します。

情報の見える化が向上すると、業務は効率化していきます。言い換えると、情報を可視化できていない、分散した状態であれば、事務所の中の紙資料を探す手間や職員同士の業務連絡での情報伝達の行き違いが発生します。

会計事務所にはびこる業務の非効率性は、ほとんどが情報の分散に起因しているのです。

② 業務の分業化

情報が一元化され、その情報が見える化されてくると、業務を分業できるようになります。

この話は第 2 章の【人材活用のクラウド化】で詳しく触れていきますが、筆者の事務所では会計実務の業務はもちろん、ホームページなどでの情報発信なども含め、多くはクラウドを通じて業務を行うクラウドメンバーで運用をしています。

その運用を可能にしているのも、結局のところ情報の一元化、見える化ができていることに他なりません。

会計業界では、ずいぶん前から製販分離が叫ばれていますが、うまくいっていない事務所も少なくないはずです。

なぜうまくいかないのかを紐解いていくと、業務を分業しようとしても今どこで誰が何をどれくらいの進捗で進めているのかわかる化できなければ、結局は属人性に頼ることを選択せざるを得ないからです。

逆に、その情報がクリアに管理できれば、分業も可能になるのです。

③ 移動時間 (ロケーションフリー)

クラウドで情報を一元化することで「見える化」が進み、かつ業務の分業化が進むと移動時間が短縮します。

例えば、事務所にしかない資料を確認する。それだけの理由のために事務所に足を運ぶ必要はありません。

会計帳簿の作成はもちろん、その会計帳簿の元となる資

料も、ほとんどはクラウド上で管理しているので、会計帳簿を作成するために事務所へ足を運ぶ必要もありません。

この話についても後ほど詳しく解説しますが、クラウドでの業務を突き詰めていくと、事務所で業務を行う必然性が下がり、当たり前のように消費していた移動時間を大幅に短縮することができるのです。

4 会計帳簿の自動作成

そして最後に感じるメリットが、会計帳簿の自動作成です。これも、つまりはクラウドによる情報の一元化がもたらすメリットであり、クラウド上にある会計ソフトとモバイルバンキングなどの明細データを同期しているからこそ可能なメリットなのです。

**「木を見て森を見ず」では
メリットは見えてこない**

ここまで読み進めていただくと、会計帳簿を自動作成してくれるというメリットは、さほど大きなものでないと理解いただけたのではないのでしょうか。

例えば、会計帳簿の自動作成で効率化した時間と在宅で業務が可能になった場合に短縮できた移動時間を天秤にかけた場合、移動時間の短縮の方が効果として大きいはずです。また、顧問先から預かった資料がどこにいったかを探す手間やその資料を整理しにいく事務所への移動時間など……。

このような時間を効率化していくためにクラウド会計ソフトを活用する、さらにもっと大きな視点で会計ソフトだけでなく会計事務所で行う業務全般についてクラウド化を考える必要があります。

なぜなら会計事務所の経営的な観点からも、会計帳簿の自動作成のみのメリットで考えるのであれば、効率化するのは帳簿作成スタッフのみですが、コスト的な観点でいえば、効率化で最も効果が高いのは人件費の高い所長や顧問先担当であり会計事務所のクラウド化とは所長をはじめとした会計事務所の職員全体のメリットを考えながら進めていく必要があるからです。



温故知新の進化論

筆者には 4 歳の息子がいます。息子は現在動物が好きで近所の上野動物園によく足を運んでいるうちに親の自分も生物の進化についてとても興味が出てきました。

そんな時に【NHK スペシャル 人類誕生】という番組を見ました。

番組では、現代の人類（ホモ・サピエンス）と数万年前に絶滅したネアンデルタール人について、なぜホモ・サピエンスは生き残り、ネアンデルタール人は絶滅したのかの秘密について迫っていました。

興味深かったのは、ネアンデルタール人は従来の知能が低く野蛮なイメージではなく頭蓋骨はホモ・サピエンスよりも 1 割以上大きく、考えられていたよりもはるかに知能が高かったのだそう。

ではなぜ、ネアンデルタール人は滅びホモ・サピエンスは生き残ったのか。その分岐点の鍵は【コミュニケーションと共有】にあったそうです。

ホモ・サピエンスは、コミュニケーション能力に長けていて比較的大きな集落を作り情報を共有していた一方でコミュニケーション能力が劣るネアンデルタール人は家族単位の小さな集落だったそうです。

これは、発掘された狩猟道具をみるとホモ・サピエンスのそれは年代を追うごとに進化しているのに対して、ネアンデルタール人の狩猟道具は情報共有の範囲が狭いためにほぼ進化が見られなかったのだそうです。

この番組を見終わった後に、やはり情報共有を円滑化する事は数万年前から答えが出ている普遍的な本質なんだなと妙に腑に落ちた気がしました。

筆者は中国古典を読むのが好きなのですが、物事の本質はなんだろう？と考えを巡らす際には新しいものよりも古いものが参考になる事が多いように感じます。

論語を出典とする四字熟語に『温故知新』がありますが、古き本質を知って現在のツールであるクラウドに当てはめると答えが見えてくる気がしています。



全体
目次



Column
目次

3

各人が感じる会計事務所
クラウド化のメリット

前項では、クラウド化のメリットとして、会計帳簿の自動作成よりもむしろ情報の一元化や業務の分業化、移動時間の短縮のほうが大きいとお伝えしました。

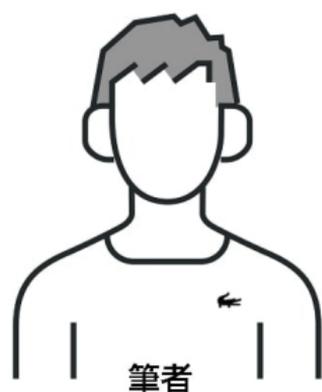
加えて、享受するメリットとしては帳簿作成スタッフより所長はもちろん所長や顧問先担当にも大きなメリットがあり、クラウド化への取り組みというのは程度の差こそあれ、取り組んだ全員にメリットがあるのです。

ただし、1点留意したいのが、クラウド化のメリットというのは事務所の規模や立場によって何をメリットと感じるかは各人ごとに違います。このことについて、具体的に見ていきます。

(1) 筆者の事務所の場合

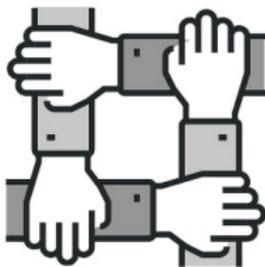
前述の通り、筆者の事務所では、現在クラウド化による分業体制を確立しています。そこで、筆者が日々の業務でクラウド化のメリットと感じる順番は次のとおりです。

筆者



1

業務の分業化



2

情報の見える化



3

移動時間
(ロケーションフリー)

4

会計帳簿の
自動作成

1人での事務所運営の場合、最大の悩みはマンパワーが足りないことです。マンパワーが足りない点については、クラウドによる分業化によって解消できています。

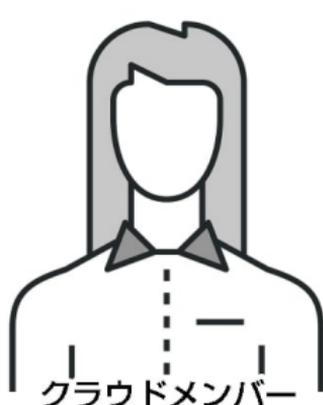
そう考えると筆者にとってクラウド化の最大のメリットは業務の分業化であるといえます。

また、業務の見える化で進捗が正確に把握できることにより、会計実務をはじめ事務所ホームページでの情報発信など複数の業務を同時進行で進める事ができています。

さらに、クラウドでの分業体制を確立していることで、事務所の外でも業務が可能ですので、遠方へのセミナーなどを実施しつつも業務は滞りなく進めることが可能であるなどロケーションフリーの恩恵を実感します。

一方、帳簿の自動作成については、既に当該業務を分業していることから、筆者自身は会計帳簿を直接作る機会はほぼありません。したがって、現在はあまりメリットを感じていないのです。

クラウドメンバー



1

会計帳簿の
自動作成



2

移動時間
(ロケーションフリー)



3

情報の見える化



4

業務の分業化



筆者の事務所では、業務は在宅の個人事業主（以下、「クラウドメンバー」）をクラウド環境で繋いで業務を遂行しています。

これは昨今の働き方改革などで取り上げられることが多くなっているテレワークやテレワーカーと同義だと考えていただくとわかりやすいのですが、このクラウドメンバーは筆者の事務所から会計帳簿の作成などの業務を受託します。

基本的に、クラウドで完結する仕事は在宅で行い報酬はすべて歩合制です。そのため、同じ業務であれば業務を早く正確に終わらせることがメリットです。つまり、筆者とは逆に、帳簿の自動作成が一番のメリットとなるのです。

また、在宅で業務を行うことで、単純な通勤時間の短縮だけでなく、スキマ時間の活用などロケーションフリーの恩恵も非常に大きいものです。

(2)

中規模以上の 会計事務所の場合

他方、中規模以上の会計事務所の所長や顧問先担当は、下記の点をクラウド化のメリットと感じるはずです。

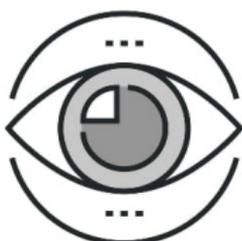
所長、顧問先担当



所長、顧問先担当

1

情報の見える化



2

移動時間
(ロケーションフリー)



3

業務の分業化



4

会計帳簿の
自動作成

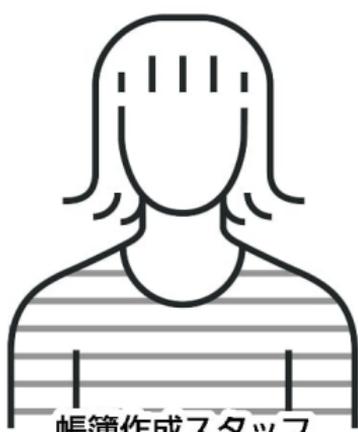


一定規模以上の会計事務所であれば、クラウド化に取り組む以前から程度の差こそあれ、業務は分業化されているはずで

す。そうであるなら、クラウド化のメリットは分業している業務がどの程度進捗しているのか、どこに業務のボトルネックがあるのかなどの「情報の見える化」こそが一番のメリットと感

ずです。また、所長や顧問先担当は外出する機会が非常に多いですが、クラウド化で情報を一元化する事で、事務所の業務を行う帳簿作成スタッフの資料を外出先のスマホやタブレットなどで端末によらないチェックなどが可能になるため、資料の確認等のためにそのつど事務所に戻るような移動時間の短縮の効果は非常に大きいのです。

帳簿作成スタッフ



帳簿作成スタッフ

1

会計帳簿の
自動作成



2

情報の見える化



3

移動時間
(ロケーションフリー)



4

業務の分業化



帳簿の作成メンバーについては、次のような順番になるはず

です。すぐに感じるメリットとしては、クラウド会計ソフトを活用した帳簿の自動作成が一番だと思います。

また、会計帳簿の作成のもととなる証憑類の管理が楽になれば、業務の効率化は進みます。

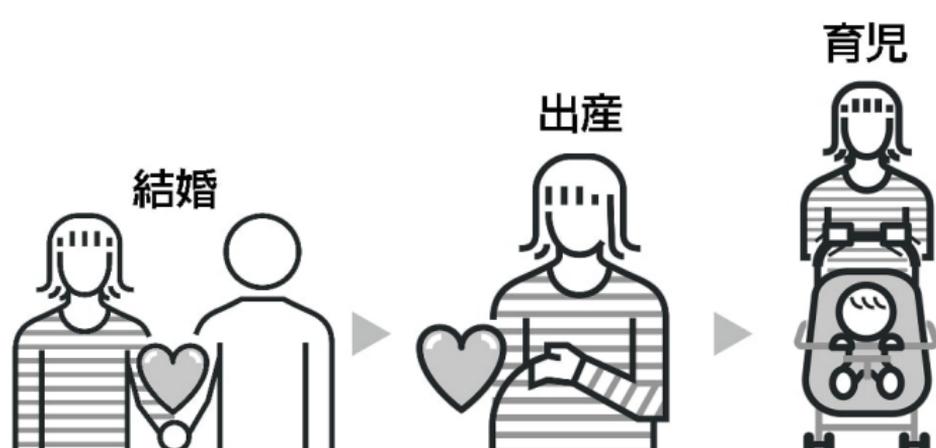
一方で、移動時間や、業務の分業化については、事務所の業務形態などを変更すれば大きなメリットになる可能性を秘めています。

第 2 章で詳しく触れますが、筆者の事務所で仕事を一緒にしているクラウドメンバーは、多くが会計事務所

経験のある子育て中のママたちです。

彼女たちは、出産前は会計事務所でフルタイム勤務していたものの、子育て中のためスキマ時間を有効活用しながら在宅で業務を行っています。

女性は、男性に比べれば結婚、出産、子育てなどライフステージの変化によって働ける環境や条件が大きく変化します。そのため、クラウド化によって働く環境や条件について、選択肢を増やしておくということが非常に大きなメリットとなることでしょう。



さらに、事務所の経営や運営という面で、有用な人材が結婚や出産を機に離職せざるを得ない状況においても、クラウド化を進めることによってフレキシブルな労働環境を提供できることとなります。

(3) 会計事務所のクラウド化ははじめの一步

今回は会計事務所のクラウド化は各人によって感じるメリットが異なるという話でした。

繰り返しになりますが、

「会計事務所でクラウド化に取り組むとメリットがあるのですか」と言われれば、非常に大きなメリットがあります。

そして、具体的に誰にメリットがあるのかと聞かれれば、メリットは全員にあります。これが、答えなのです。

前述の通り、本書は中規模以上の会計事務所のクラウド化をテーマにしています。

そうした前提において、事務所をクラウド化させて効率化していこうと考えた時に、たかだか数十人の規模で、誰か特定の職員には非常にメリットがあるが別の職員はメリットを感じない、あるいは半信半疑という状態であれば、クラウド化は進むはずがないのです。

一方で、事務所の職員各人がクラウド化のメリットをイメージでき、なぜ進めていくのかを理解することが会計事務所のクラウド化のはじめの一步なのです。



4

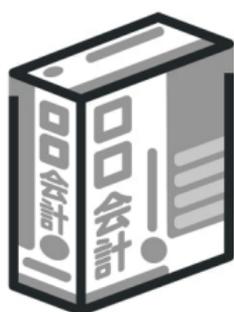
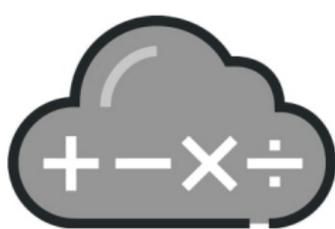
会計ソフトの前段階をクラウド化する

本書は、クラウド会計ソフトの活用方法の本ではなく、【**会計事務所の業務全般のクラウド化**】をするための内容である旨は既に述べましたが、では具体的に何をすれば会計事務所がクラウド化していくのかという点について、ここから説明していきます。

まず、このページのタイトルの通り「**会計ソフトの前段階をクラウド化する**」ことこそが最優先課題なのです。

具体的には、このあと順序立てて説明していきますが、会計事務所においてクラウド会計の活用が進まない理由を紐解いていくと、多くの場合は「**会計ソフトのみをクラウド化**」していることに原因があります。

つまり、クラウド会計ソフトを導入すれば事務所のクラウド化が進み、業務が効率化すると思っ込んでいるのです。

インストール型
会計ソフトクラウド
会計ソフト

会計ソフトのみをクラウド化している

しかし実際には、クラウド会計ソフトを導入しても効率化を実感できないというのは前述の通りです。

その理由はクラウド化をする手順が間違っているのです。手順としては、まずは会計ソフトの前段階をクラウド化する。そして会計ソフトをクラウド化する。これが正しい手順なのです。

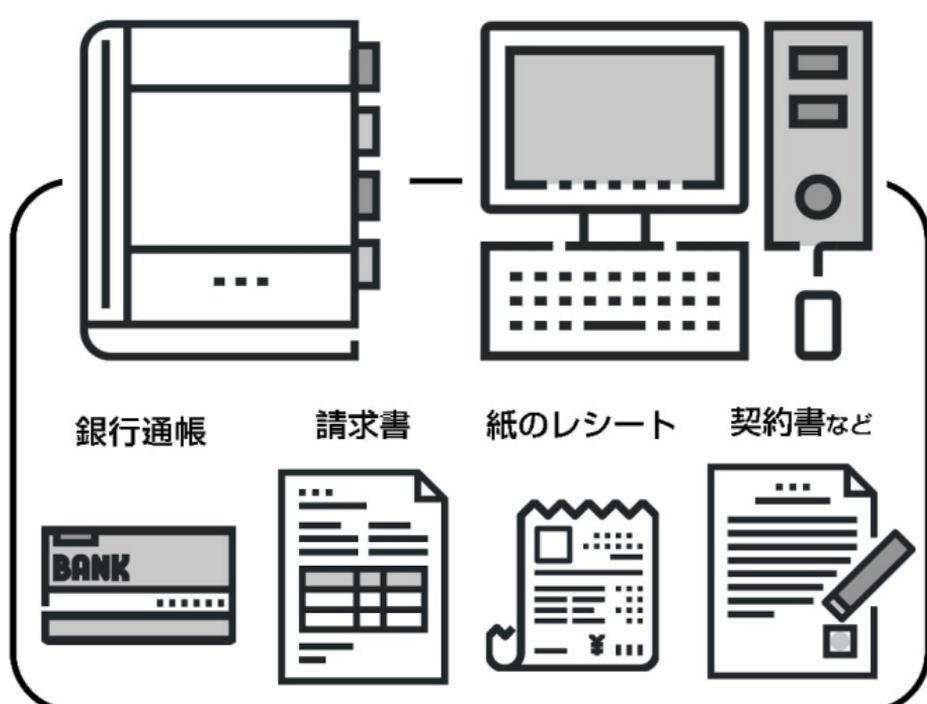
会計帳簿はどうやって作るのか

では、具体的な方法について述べる前に、会計ソフトをクラウド化するだけでは会計事務所のクラウド化が進まない理由について、もう少し詳しく説明していきます。

さて、そもそも会計帳簿はどうやって作るのでしょうか。会計ソフトに複式簿記の仕訳を入力していくために、作成の元となる証憑類が必要ですが、その証憑類はどこにあるのでしょうか。

おそらく多くの場合は、会計事務所の中にあるサーバーや、ファ

インストールされた紙資料であるはずですが。



会計事務所の中にある証憑類

当然、その資料がなければ会計帳簿は作成できません。そのため、事務所に足を運んで業務を行うことになるわけですが、ここで考えていただきたいことがあります。

事務所にわざわざ足を運んで、事務所のサーバーや紙資料などを見ながら会計帳簿を作成するのであれば、クラウド会計ソフトを使う意味はあるのでしょうか。

必要はない、とまでは言いませんが、クラウド会計ソフトの特性を活かした使い方とは言えないはずです。

なぜなら、前述の刀と鉄砲の例えの通り、クラウド会計ソフトというのは、場所や端末にとらわれずに操作ができ、多人数で操作ができ、かつ修練度はさほど必要がないという特徴があるからです。

しかし、従来の業務の通り、事務所に足を運び事務所の資料を見て事務所のパソコンで会計ソフトに数字を入力しながら使用するのであれば、クラウド会計ソフトの特性とは真逆の使い方をしていることとなります。

そうであるなら事務所にインストールされた会計ソフトで入力の方がむしろ効率的ではないでしょうか。

つまり、この使い方をするのは、前述の例えの通り、鉄砲を持って刀の戦い方（素振り）をしているのと同じことなのです。

証憑類は事務所
(ローカル)

会計ソフト
クラウド



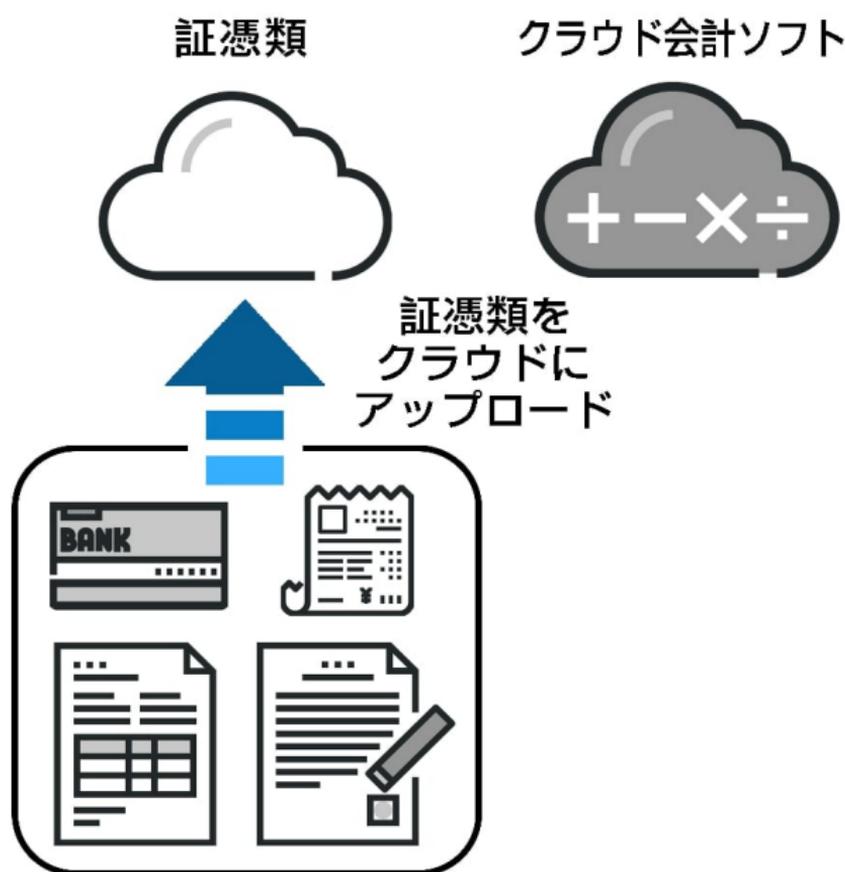
クラウド会計ソフトを使う意味はあるのか？

会計ソフトの
前段階をクラウド化

では、クラウド会計ソフトを活用する、ひいては前述したクラウドのメリットを享受するためにはどうすればよいのか。

答えは非常に簡単で、会計ソフトだけをクラウド化しても意味がない。そうであれば、会計ソフトに入力する元となる証憑類をクラウド化してしまえばよいということになります。

これが、筆者のいうところの、「会計ソフトの前段階をクラウド化する」ということなのです。



会計ソフトの**前段階**をクラウド化する

しかし、これが「言うは易く行うは難し」です。それができていれば会計事務所は非常に効率的な業務ができるはずですが、そうはなっていない現状があるのです。

様々な理由はありますが、最大のハードル。

それは紙です。



全体
目次



第1章 [意識、価値観の
クラウド化]
目次

5

会計事務所の業務が
ペーパーレス化しない理由

会計業界でも、他の業界と同様に以前からペーパーレス化が叫ばれています。しかし、実態はどうでしょう。出力された紙の資料をスキャンし、PDFなどのデジタルデータとして保存するいわゆる「**事後的ペーパーレス**」に過ぎないのではないのでしょうか。

そもそも紙を出力せずに業務を行う「**業務フローのペーパーレス化**」を実現したという話を聞く機会はありません。筆者は、この業務フローのペーパーレス化こそが、本来あるべきペーパーレス化だと考えています。

では、なぜ会計業界はこの「**事後的ペーパーレス化**」しかできないのでしょうか。その原因を考察します。

(1) 紙資料のメリット

会計事務所のペーパーレス化がなぜ進まないのかという話題においては、よく次のような意見があがってきます。



顧問先はアナログ思考で紙で資料をよこすからペーパーレス化が進まないんですねえ…

つつい問題の原因を顧問先に転嫁しがちになりますが、考えてみると、会計事務所内の職員同士の資料のやり取りにおいて非常に大量の紙が出力されていることに気がつきます。

例えば、決算書や月次で作成した試算表などをチェックしてもらう際には、作成した決算書などの資料一式はもちろん、その作成の根拠となった会社の登記簿謄本、定款、契約書、各種の根拠資料、表計算ソフトで計算した集計表に至るまで全て出力し、丁寧にファイリングしていませんか。



決算書

元帳

契約書など計算根拠など

PCで作った資料を紙に出力してファイリング

ではなぜ、わざわざ出力をするのかといえば、チェックする者が資料を見間違えたりチェック漏れを防ぐためです。

1つの計算ミスで数字が大きく動いてしまう決算書などのチェックについては、根拠資料などをいかに漏らさず、チェックしてもらうかが大事です。そうすると、紙に「○○の根拠はこの見出しです」と指示をすれば、チェック者は、資料の取り違いなど起こさないはずで

つまり、紙資料というのは、「情報の伝達に最適な媒体」であるといえます。



紙資料は情報の伝達に最適な媒体

(2) デジタルの情報伝達は難しい

一方、紙に対してデジタルデータの情報伝達は難しいといえます。

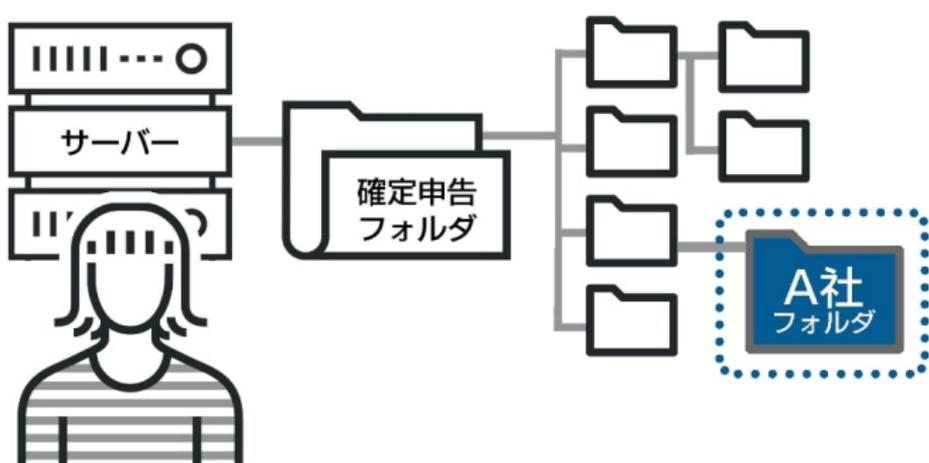
例えば、先の例のように、決算書などをチェックしてもらう際には、理屈としては事務所のサーバーに資料を格納し、チェック者に対して該当するフォルダやファイルの場所を指示すれば、チェック者はそのデータを確認できます。

そうすればデジタルデータをつど紙に出力する必要はなく業務フローのペーパーレス化となるわけですが、実際はそう簡単ではありません。

なぜなら、この方法ではチェック者が該当するフォルダやファイルの取り間違いや認識違いなどのミスが発生しやすいからです。

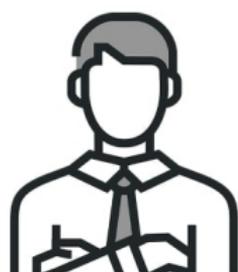
資料がどこにあるのかなどを探した際に、認識違いも回避できません。

そのため、複数人の事務所であれば事務所内に社内サーバーなどが設置され共有のデジタル環境にアクセス可能であるにも関わらず、情報の伝達にはミスの少ない紙を使用しているのです。



サーバーの確定申告フォルダのA社フォルダに資料を入れましたのでチェックをお願いします

資料を取り間違えたりミスの元だから紙でファイリングして渡してよ



デジタルの情報伝達は難しい

(3) デジタルの情報伝達のメリット

紙資料は情報伝達を行いやすく、デジタルデータは情報伝達が難しい。だから、なんだかんだ言っても紙がよい。これが、会計業界に従事する者の多数派の価値観なのではないでしょうか。

ただし、紙資料の情報伝達には非常に大きな欠点があります。

それは、同じ空間かつ個人間の情報伝達には非常に優れている一方で、別空間かつ多人数の情報伝達には使えないということです。

一方で、デジタルの情報伝達は難しいと述べましたが、紙の情報伝達とは逆に、別空間かつ多人数の情報伝達や情報共有には非常に有利です。



別空間、多人数の情報伝達に有利

(4) 紙の情報伝達からの脱却

「別空間」かつ「多人数」というキーワードが出てくると、ここまで読み進めていただいた皆さんはピンときたのではないのでしょうか。

これが、会計事務所のクラウド化という話に直結する話なので
す。

つまり、「**会計事務所のクラウド化がなぜ進まないか**」とい
う問いに対する答えは、同じ空間かつ個人間の情報伝達に
有効な紙に依存しているからなのです。



紙の情報伝達への依存がクラウド化を阻む

同じ空間で情報伝達をしなければいけないので、事務所に
足を運ぶ。そして、紙資料を出力し個人間の情報伝達をする。
そのために、多人数で業 務を分業することができず、属人
化していく。

結果として、クラウドというテクノロジーによって別空間かつ多
人数での業務が行いやすいインフラがあるにも関わらず、それを
活用できていないというのが現状なのです。

ただし、このように紙の情報伝達のメリット・デメリットと、デジ
タルの情報伝達のメリット・デメリットを整理していくと、何をすれ
ば解決するのかに対する答えはシンプルです。
それは、デジタルの情報伝達の精度を紙の情報伝達と同様か、
それ以上に上げればよいということです。
この点を踏まえ、次項からは、具体的にクラウドツール等を活
用した方法を解説します。

